

幼 児 の 教 育

第 四 號

第 七 十 四 卷



日 本 幼 稚 園 協 會

幼稚園を實證するもの

(時 言)

幼稚園を實證するものは、一つ一つの幼稚園、一人一人の先生である。意見は主張する、理論は論ずる、制度はさだめる。しかも、幼稚園とはこういうものだと言証し、幼児保育はこういうことだと言証するのは實際だけである。普及の宣傳も必要だ。運動も大切だ。しかし、ほんとうの幼稚園とは此の通りだと示すことの出来る幼稚園、成る程これが幼児保育者かと感じさせることの出来る先生によつてこそ、幼稚園が認識せられ、幼児教育が理解せられるのである。

理想の幼稚園、理想の先生と、理想という言葉が、そうやすやすと使えるものではない。また、そうらくらくと使おうとは決して思わない。たゞ、我が子に對する眞の親心の中心に觸れるもの、それを満足させるに足るものでなければならぬ。親の要求にも、その生活その文化の程度によつていろいろの差はあるかも知れないが、親心の眞純と尊貴に變りはない。それは、必ず深いところで我が子の教育を求めているものであり、こまやかに我が子の幸福を希つているものである。その親心を實際に充たすことなしには、幼稚園も幼児保育も、眞實に親の心に實證せられない。一人一人の親心に實證せられることなくして、幼稚園と幼児保育の社會的實證は成立しない。

あゝいう幼稚園が我が町にもほしい。あゝいう先生に我が村の子も保育して貰いた

い。——更に、あゝいう幼稚園を是非つくりたい、あゝいう先生に是非なりたい。こういう順序で、幼稚園と幼児保育が、町から町へ、村から村へ、どこの町へも、どこの村へも傳つてゆくのである。社會に普及してゆくのである。

この意味で、今ある一つ一つの幼稚園、今働いている一人一人の先生こそが、幼稚園と幼児保育の發展の中核であり原體である。その中核と原體とが充實してないでは、恐らく眞の理解と認識を社會に實證的に力づくで確立させることは、むづかしいであろう。

これは、あまりいゝ言葉ではないようでもあるが、たいらに見本といつてもいゝかも知れない。一つ一つの幼稚園、一人一人の先生が、見本のために存在しているので決してないことは勿論である。その嚴肅な存在を見本などいゝのは全く當らない。しかし、それは、おのずから、よい見本とならずにいないのである。

わが國の幼稚園と幼児保育との現状は、こうしたよい見本が必要なのではあるまいか。その見本による實證が足りないがために、社會の關心と熱意とが、社會に強く廣く生起し燃え上つて來ない、少くも一つの理由になつていたのでなかるうか。

これはわれわれ自身としての苦しい反省であるが、幼稚園義務實現の大きい勢力の中の一つの責任割り當てもある。

第 四 卷 幼 兒 教 育 第 四 號

目 次

幼稚園を實踐するもの(時言).....	坂元彦太郎.....(2)
樂園の新生.....	松原至大.....(8)
英詩に見る子供の姿(四).....	森重静夫.....(13)
乳幼児栄養とカルシウム.....	堀七藏.....(17)
幼児のすきな春から夏の生物.....	
= 保育の實際 =	
實際興味と主題による遊戯指導.....	岡崎修子.....(19)
幼児と語る心.....	大塚喜一.....(26)
新入園児を迎える心.....	倉橋惣三.....(27)
講習會豫告.....	
會 か.....	(32)

樂園の新生

文部省初等教育課長 坂元彦太郎

一

「樂園の再興」という、思いあがつた題の拙文を、「幼児の教育」にかかけてから、一年あまりになつた。その一年の間に、日本の幼児教育にとつては、少くとも二つの歴史的な事件がおこり、その二つながらに、私も分に應じた役割をもつたという思出は、ひそかに私の胸をあたためてくれているものである。一つは、学校教育法に幼稚園の章を入れこむことができたということである。こうして、學校の一種として、幼稚園の嚴然たる位置を確立したことは、人間の正規の計畫的な教育の第一着手としての幼児教育の意義をはつきさせたことである。とにかくいゝゆる就學前の教育の重要を國民の總意が認めたのである。これで、幼児教育の將來の發展の足がかりが、とにもかくにも、しつかりきずかれたのである。従來は、周知の通り、幼稚園も、一種の教育機關としては認められていたが、學校の一種であるのかないのか、判然としないままにおかれていた。その外にもいろいろな法的な不備がそのままにのこされていて、幼稚園そのもの、幼稚園教

育者の位置がすこぶるあいまいであつた。保姆養成所のごときも、全くその根據となる法規がなかつたのであり、教員の待遇や地位もあやふやな所があつた。學校教育法はこれを一掃して、幼稚園の位置や役割を確定し、教員は他の學校とひとしく教諭とよばれ、あらゆる立場において同等となつた。少くともその基礎ができた。養成機關や免許状についても、近き將來においてすべての學校に關するそれらのことができるときに、全く同じようにきまることになる素地ができたのである。學校教育法は「機會均等」の門を、幼稚園とその教師に對してひらいたということができよう。さらに、學校教育法は、幼稚園の目的を新しく規定しないし、その目標として五項目をあげて、その教育の方向と内容ををはつきり示したことも、今までになかつたことである。しかもその目標が幼兒の心理的生理的な發達に應じたものがかけられていたことも特筆されていいのではないかと思われる。しかもその具體的な内容や方向については、そうした目的や目標を實現するに一番適切な方策を、監督廳（當分は文部大臣、將來は教育委員會になるかも知れない）が定めることになつてい

る。動かすことのできない教育目的や、その具體的なあらわれと見るべき諸目標は、はつきりと法律で定めておくが、たの運用の實際は、その時その所に最も適切なものがたられるように下部の機關に任してあるのである。そして、それが、「保育要領」というかたちで、文部省が出すことになつたのである。

「幼稚園」を學校の一種として正規の教育體系の一種とすることには、相當な反對論があつたことは周知の通りである。原案作製の際にも相當微妙な空氣があり、反對者もあつたのであるが、一般に幼児教育の重要性が認識されて、結局、あつた法律となつて國會を通過したことはよろこばしい極みである。實は「幼稚園」という名前についても、いろいろえられたのであるが、適當な名がなく、忘れがたいにおいをもつているその名前をそのまま用いることになつたのである。このことは新しい幼稚園は、ほんとの幼稚園の精神をよみがえらせて、現代の事態に相應するように進んでいくべきであるということを示唆しているとも、解釋することができであろう。本來の精神をつらぬいて、新しい幼児保育の道をうちたてること、これが新生の幼稚園に與えられた課題なのである。

一一

二つは、「保育要領」の刊行である。今まで、わが國では幼児教育のための、公に示されたより所というものは、幼稚

園令とその施行規則の外には全くなかつたといつていい。ために、「保育項目」とかいつて、小學校の「教科」の考え方をそのままもつてきて、幼稚園教育の一つの型ができあがつていたのも、やむを得ないといえはばいえるのであつた。いつのまにやら、暗中也、さくの中から、一つの定形的な保育の仕方がたまつて、その中に安住していたのであつた。法規的な制限がなかつたことは、正しくいえば、各幼稚園の自主的なやり方をみとめつゝすすめたことであつたのであるが、事實は逆の結果となつて、劃一的な幼稚園くさい、一つの型にはまつたマンネリズムを生む、という皮肉な現象におちいつてしまつていた。しかも、日本の教育體系の全部にわたつて、新しい歩み出し方向が必要となつたとき、他の部面にはすでに何らかのよい所が與えられているに對して、幼児教育については何の方向も具體的には示されていないのであつた。決して他律的な態度からではなく、まじめに新しい方向を探究する意味において、何らかの方向の提示をのぞんでいた幼児教育者の心根は高く買われていいものであつた。

こうした缺かんをおぎない、要望にこたえるために、保育要領が出されることになつた。終戦後のどさくさまぎれに、幼稚園のための豫算は一文もないのに、保育要領編さんのための委員会をひねりだし、とにかく何とか成案を得て、萬をこえる部勤を刊行し、全國四ヶ所での趣旨普及の講習會をするにいたつた。このあやうい藝當には、われながら冷汗を禁じ得ない位である。これは、ひとえに、ヘフアン博士

の後だと、委員の方々のお骨折りと、その背後にある幼稚園教育者の總意によつて、はじめてできたことであると、いまさら、感激に堪えないのである。

これは、幼稚園教育についての、よるべき規準を示したものであることは、學校教育法の施行規則でまづつてゐる所である。ちようど、他の學校における「學習指導要領」にあたるものであり、法律の條文に基づいて、その教育の内容や方向を實際にきめることがこれに委ねられてゐるのである。その意味において「保育要領」はただ單に新刊の保育書といふにとどまらない重要な役割をもつものである。しかしながら、誤解をふせぎたいことは、決して「保育要領」は、どうしても一言一句守らねばならない固定的なものをおしつけてゐるのではないことである。むしろ、關係者（教師、母親、さらに他の種の保育施設の關係者）たちへの好意ある助言であり、彈力ある自主的な實施を要望してゐるのである。

と同時に、保育要領が、ほんとにこどもの心身の發達に應じ、こどもの經驗を通じて、その生長や發達を助長しようとする新教育の精神につらぬかれてゐることを忘れてはならない。少くとも、從來の古いからを脱皮して、新しい方向へ歩みだそうとする熱意にもとずいて、編さんされたものである。新しい道へ、一步でも先驅的な役割を果そうとの熱意にはもえていたものの、わが國における研究や經驗の實情では、十分な成果をすみずみにまで遂げることができなかつたのは、ゆるされてもいいであらう。ある所ではきわめて大

膽に、ある所では相當おく、病な態度で、いままでとは變つたことがらを示してゐるが、決して十分とは思われない。つまりは、新生幼稚園に對して、新しい問題を提示したものとして、研究の土臺とし、批判の對象とされて然るべきものであらう。

二二

實は、先達この文を「樂園の貧困」という題のもとに構想し、書きはじめていた。所が、そのさい中、おひなまつりの楽しい幼稚園の一時を偶然にも經驗する機會を得たのである。私は、こうした天上の幸福を、「貧困」という活字で汚すにもしのびなくなり、「新生」という文句に書きかえたのである。しかしながら、折角、こうしてできた新生幼稚園でありながら、そこにはいくつかの難問がよこたわり、ゆたかな花が咲いておるべき所が必ずしもそうでないという事實について書こうとしたはじめの意圖をまげることができない。

幼稚園の現在が、一般的にいつてその内容が貧弱であり、その經營に多くの困難があることは、打ち消すことのできないことである。私も、この一年間、いろいろの問題にぶつかり、さまざまに感じ、なやみもした。そのうちのいくつかを、おちまけて見ようと思う。

幼児教育が、どの學校教育者よりも、ほんとにこどもを愛してゐると、私は信じていたのである。そのことは、今でも、私はそう思つてゐるが、他の部門と比べると幼児教育者

が子どもの登道に適した教育を一番よくやつてゐると今までは私が考えていたことは、修正を要するように思ひだした。

子どもを一番愛してゐること、そして、子どもたちに適した教育をやつてゐるつもりでゐること、これは疑えないのであるが、學問的、研究や批判的な経験の不足から、客観的に見て今までの保育のやり方の全部がほんとに適切であつたとはいわれない。かえつて、眼界の狭さから、幼児のほんとの姿を見あやまつてゐる場合や、正しく幼児の要求を理解してゐない場合が、相當多いということに私は気がつきかけた。もつと、學問的な研究や、視野の廣さ、教養の高さが必要ではないか、相手が幼少であればあるほど、大人から遠ざかつてゐるので、一層そうしたものが必要とするのではないかと考へるようになったのである。ことに、自分たちが幼児にはこういうことが適當だ、と思つてゐるほとんどすべてのことについて、自分たちの幼児教育の経験の一切について、一應根本から反省しなおして見る必要はなからうか、という氣がしたしてゐるのである。それを一部分には、やや具體的に、「保育要領」が示してゐるとは、いふもの、まだ非常に不充分であると思はれる。少くともそうした氣持になつて讀んでいただきたい、ということをお望みするのである。

私がこの頃、不思議でならないのは、「教科書」も教授要目もなかつた幼稚園が、ほとんど全國を通じて一律といつてもいい共通な、うたやおどりや製作や、等々でぬりつぶされてゐることである。「國民學校」が畫一的であり、全國似通つ

たものになつたのはまだわかるが、幼稚園のように、自由なやり方が徹底的に認められ、それぞれの環境における幼児に適切であればいいというだけの條件であるのに、こうした全國的な共通のやり方は、一體どうしたものだろうか。幼児の發達が低度であるために全國共通であるという人があるかも知れないが、子どもも自由に遊ばせてゐるときに自然におとる共通性は當然だと思ふが、大人が幼児向につくつた歌やおどりがそれと同断とはいえないであらう。子どもに對するあふれるような愛情と、幼児が思うままになる従順な動物であるということなどが、こうした創意や彈力をもたない、マソネリズムに安住させてしまふのだと、解釋する外はないのである。

このことを私が氣にするのは外でもない。幼児たちの幼兒らしい自由な創意と野性的なはつらつさをいつのまにやら一つの型にはめてしまい、その自在な發揮をばはみはしないかと、おそれるのである。もつと、彼等を思うぞんぶんあそばせることはできないものか、もつとひとりひとりがつたことをやらせる所であつていいではないか、劃一的な「しつけ」が子どもたちのたくましい生長やゆたかな發達をばはんではいないだらうか、しろうとらしく、私は氣になつて仕様がなないのである。今までの幼稚園でも、たしかに幼児も先生もたのしくしあわせな樂園であつた。がもつと、楽しく幸福な活氣にみちたものになれるのではなからうか。私には、この樂園が幸福なあまり、その生活の内容が貧困であるのだ

とさえ見えるときがあるのである。私には、どうしたらいいのか分らない。しかし、そう、明な實際家のみがこれを打開することができることを信じている。

四

しかし、樂園を貧困にしているのは、決してひとごとではないのである。明治以來、日本の政府はその毎年の豫算書に正式に幼稚園のための項目を設けたことはないのである。例外として昭和二十二年度に高等女學校の保育施設へ補助のわずかな額の所に「幼稚園」という文字が入つただけである。こういう、國家の力の入れ方の足りなさも、まことに残念なことである。私どもとしては、少しづつでも、この方面に對してできるだけの地歩を進めようと努力するつもりである。

もつとも、幼児に對する教育の施設についての直接の責任者は市町村なのである。この方面の理解も、從來も現在も、決して充分とはいえなかつた。しかし、市町村も國と同じように、いわゆる六・三の義務制の所の手一ぱいなのである。その實情を充分認識しながら、できる所でできる限り、幼児教育の施設へ手を着け、さらに向上させるよう、あらゆる方面で努力を続けねばならないであらう。

戦後、相當な数の幼稚園が復興し、さらに増設された所があるのは、うれしいことである。しかし、もつともつと、放任されている幼児たちへ、何らかの暖かい教育の手がのぼされるようになってほしい。たとえば、中學校が獨立校舎に移

つたような機會に、もし小學校に餘裕の教室ができたならそこに幼稚園を併設するようにする、というようなことも、のぞましいであらう。率直にいえば、現在はある程度の貧弱さがあるにしても、できるだけ多くの町村に幼児教育施設を普及することに努力することが一番大切である。教育的な明るさをもちながら、大衆的に普及できるということが、別面から見た新しい幼稚園の特色でなければならぬ、といえるのである。

保育所と幼稚園との關係が問題にされていることも見逃すわけにはいかない。學校教育法による幼稚園と、兒童福祉による保育所と、それはすなおに考えれば、それだけの役割と位置を異にして、充分兩立していけるものであり、また兩立しなければならぬはずのものである。不幸にして、いろいろな事情から所々に混亂やいさかきがおこつていようであるが、結局は當事者たちがほんとの幼児の爲を思つて現地で解決してもらう以外にはない。兩者を一本にせよ、という論も充分な理由があることを認めるが、保育所も幼稚園もそれぞれ就學前の幼児の一割足らずしか收容していない現状では、ある程度の施設の貧しさはかまわず、少しでも幼児たちのためになるものがどしどし出来ることがのぞましいのではなからうか。しかも、しだいに、社會政策的な保護の面をつよくもつものと、幼児の心身の教育の面をつよく現わすものとが分れていき、それぞれの役割を果すようになればいい。そして、満五才のこどもも入園率が六割や七割を越えるよう

になり、わが國の財政のたちなおりの時をつかんで、義務就學制を布くことができるような日を、早く迎えたいものである。

新生の幼稚園には、實に多くの問題と困難とが待ちかまえている。折角の入園希望者の増加にもかかわらず、充分な収容力がない。設立しようとしても資材がない。經營が充分でない。その經營はインフレの影響を受けて、困難をきわめている。先生の待遇も低い。これに堪えて、その中で、いろいろどりの花を咲かしている樂園の花守りの御苦勞はなみ大いではなからう。そして、こうした「貧困」の中で、新生の意義にもえている幼児教育者の愛情と熱意が、いつかは、このいばらの道を切りひらくであろうことを私は確信している。

新しい幼稚園——その具體的な内容と方法とは、ひとえに今後の歩みによつてきまる。米國や英國でいえば、ナーサリー・スクール（幼兒學校）のように普及し、そうした經驗に近いものになるであらうとも思えるし、また、わが國では何か獨特の通をたどるようになるかも知れない。一切はこれからのことである。

〔十頁から〕

これはスコットランドのジエイムズ・ホグ（一七七〇年——八三五年）の作である。作中のピリーとは、いうまでもなく少女の名である。あるいは彼の幼い日の思出であろう。健康な少年と少女の姿をかりて、美しい人生をうたつてゐる。平明な言葉の中に、明るく男性と女性の今日と明日とが語られている、と思つてはいけないことであろうか。なにげない一の言葉にも、この詩人はいいようのない人生の深さを味わわせてゐる。ホグはスコットランドのウランスリーの森、エトリツク・フォレストに生れて、幼い時から羊飼（シエファード）をしていた。そのためエトリツク・シエファードというペンネームを持つてると傳えられる。（つづく）

×

×

×

×

×

×

英詩に見る子供の姿 (四)

松原至大

赤ちやんの足 (スウィンバーン)

ピンク色の貝がらのような

赤ちやんの足。

天國で出會いでもしたら、

天使のくちびるは

キスをせずには

おかないかもしれない

赤ちやんの足。

ばら色のインギンチャクのように、

暖かい方へ差しのべられたり、

ひろげられたり、

ちらちらと動いたり

離れ離れになつていて

それでも纏がつている

十本のやわらかい芽。

天から與えられた美しさに輝く
ふくらんだり縮んだりする

またとない鈴形の花。

まだ足あとのない人生の絶壁の上に

輝いているような

赤ちやんの足。

これは詩人として、劇作家として、また文藝批評家として知られたイギリスのアルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン(一八三七年—一九〇九年)の作である。赤ちやんの足をとらえて、かわいさと美しさとはばかりではなく、前途にひかえたかも知れない人生への嚴肅さを考えさせる。

スウィンバーンとほとんど時代を同じくしたイギリスの詩人に、ジョージ・マクドナルドがいる。彼がうたつた「赤ちやん」は、次ぎのとおりである。

かわいい赤ちゃん (マクドナルド)

お前はどこから来たのかしら。

「どこからか、ここへ来たの。」

お前はそんなに青い眼を

どこで頂いて来たのかしら。

「私が来る途中、あのお空から。」

なにがその眼の光を、

きらきらぐるぐるさせるのかしら。

「お星さまの光が残っているの。」

お前はあの少しの涙を

どこで頂いて来たのかしら。

「私がここに来た時、

私もそれに気がついたの。」

なにがお前の頬を

そんなに滑かに高くしたのかしら。

「私が来る途中で、

柔かな手がそれをたたいたの。」

なにがお前のほほを

暖かい白ばらのようにしたのかしら。

「私はたれも知っていないよ

よいものを見たの。」

あの心からの喜びの

三つのえくぼは何うして。

「三人の天使が

一度にキスをして下さつて。」

お前はこの眞珠の耳みゆを

どこで頂いて来たのかしら。

「神さまがお話しなされたの、

そしたら、聞こえるようになったの。」

この腕と手は

どこで頂いて来たのかしら。

「愛がそのつながつたものを

作つてくれたの。」

足、それはどこから来たの、

かわいい足。

「天使の翼と同じ箱の中から。」

それがどうしてみんな

お前のものとなつたのかしら。
「神さまがお考えになつたの、
そして私は育つたの。」

そんなら、どうして

お前は私たちのところに來たのかしら。

「神さまがお考えになつたの、
だから私はここにゐるの。」

以上の二作を比べて見ると、二つながらなん等の新奇なものを見出しがたいが、十二分に詩人の高貴な心が、私どもの心に流れてくるように思える。しかもそれは人の親として、いなみ得ない美しさ、楽しさである。

少年の歌 (ホグ)

輝いて深いお池のあるところ、
灰色の鱗がじつと眠つてゐるところ、
川をのぼつて、草原を越えて——
それがピリーとぼくの行くところ。

黒鳥くろどりがおそくまで歌つてゐるところ、
さんざしの花が美しく咲いてゐるところ、
ひな鳥がさえずつたり、
かくれたりするところ——

それがピリーとぼくの行くところ。

草刈がきれいに草を刈つたところ、
乾草がうす高く、緑色してゐるところ、
お家へ急ぐ蜜蜂を追いかけるところ——
それがピリーとぼくの行くところ。

それはぼくにはわからないこと。

はしばみの土手の急なところ、
木かけが深々としてゐるところ、
すすなりの木の實がしきりに落ちるところ、
それがピリーとぼくの行くところ。

なぜ男の子たちは、
おとなしい女の子を
遊びからしめ出したり、いじめたり、
けんかばかりしたがるのだらう。

それはぼくにはわからないこと。

でもぼくはこれだけは知つてゐる、
ぼくは遊ぶのが好きだ。

草地を通つて、乾草の間で、
流れをのぼつて、草原を越えて、
それがピリーとぼくの行くところ。

それがピリーとぼくの行くところ。

乳幼児栄養とカルシウム

東京都立駒込病院副院長兼小兒科醫長
東京女高師講師醫學博士

森 重 靜 夫

人間が生きていくためには栄養素である蛋白、脂肪、炭水化物、無機鹽類、ビタミン等の適當量を攝取しなければならぬことは、既に知られて居る通りであるが、其の栄養素の中の何れが缺けても栄養上の平衡が失われて健康上面白くないことが起るのであることも容易に考えられるのである。殊に此の問題を人間の年齢という見地から検討して見ると乳幼児のような發育旺盛な時期に於ては、既に發育を完了した大人の場合同比すると多分に其の影響することが大きなことが分る。即ち乳幼児期に於ては、自分の體の栄養状態を保持する上に、さらに進んで成長ということをしなければならぬ。

それがためには大人に比べると體の大きさの割合により多くの栄養素を必要とし、萬一その供給に不足を來せば、其の成長は妨げられ、或は停止して終わなければならないのである。

さてさて、栄養の問題を云々するに當り、蛋白質、脂肪、炭水化物等に就ては勿論、ビタミン等に就ても日頃色々の場合に説かれて居るようであるが、無機質のことに關しては關心が少いように思はれる。そこで無機質として我々の體が要求するものを考へて見るに、人體を構成する成分の中で無機質

を拾つて見ると、カルシウム、カリ、燐、硫黃、鹽素(ナトリウム、ナトリウム、マグネシウム、鐵、マンガン、銅、沃素、コバルト、亞鉛其の他のものであるが、この中カルシウム(石灰分)を除いては、我々の日常の食物中に入つて居るものから必要量だけは充分に攝られ、又其の必要量も極く微量でよいものが多いのである。所がカルシウムはやゝもすると攝取量に不足を來す恐れが多いのである。

こゝでは栄養上必要な無機質全體のことに就て起すことを避け乳幼児の栄養上必要なカルシウムの問題だけに就て起すこととする。

昨年の夏、アメリカから我國に渡來した疫痢調査團は、日本の幼児は食餌から攝取するカルシウムの量が少いこと指摘し、疫痢の時などに劇しい痙攣を起すのも、カルシウムの不足が與かつて關係の深いものであると發表したのである。疫痢とカルシウムの問題に就て述べることは今後の機會にゆずることとして、唯我々としては、日本の幼児が攝取するカルシウムの量が少くて、それがために發育成長に及ぼす影響があるとするれば、これは栄養上重視すべき問題であるから此處

ではこの問題に就て話をすゝめることとする。

最初にカルシウムは人間の體の中で、どんな所に多く含まれ、又體の中でどんな機能を有するものであるかを考えて見る必要がある。人體中でカルシウムを最も多く含む所は骨格と齒であるが、骨や齒を形成するには磷とカルシウムとが最も必要である。この中磷は穀物の中にもかなり多く含まれて食物全體として考えたと不足することはないが、カルシウムは磷と結合して始めて骨が形成せられるのであるから、カルシウムの量が少なければ磷だけ充分に在つても骨は作られない。カルシウムは骨や齒の形成に必要なばかりでなく、一定量は常に血液の中に含まれなければならない。血液中に於ては血液をして、他の無機鹽類を作る元素例えば、ナトリウム、カリウム、鹽素、磷、マグネシウム、等と綜合配置されて、中性乃至微アルカリ性に保つように役立つて居る。そして、それによつて人體内では色々の新陳代謝が圓滑に營まれるわけである。

従つて若しカルシウムの攝取量が必要量以下である場合にはどんなことになるかと考えると、第一に骨格や齒の形成に障害が來ることになる。其の結果は化骨が遅れ、高度の場合には佝僂病にまでなり得る。又齒の形成は悪く、何れにしても一生涯多くの難儀を見なければならぬことになる。第二に起る障害は、テタニーという病氣になる。テタニーという病氣はどんな病氣かという、神經の機能に障害を起す病氣

で、これを通常、表在性のテタニーと潜在性のテタニーとに分けられる。表在性のテタニーというものは痙攣性の發作が起り、時には手や足の痙攣ばかりでなく聲門の痙攣のために聲が出なくなつたり、呼吸が出なくなつたりすることもあつて、外觀上はてんかんのような症狀を呈するものもある。こんなひどい状態になれば誰でも直ぐに氣がつくのであるが、潜在性のテタニーといふ程度のもものでは、平常は少しも判らないが、色々な刺激のあることに遇えば痙攣を起すもので、平常の状態でも、電氣反應や機械的の刺激を（特別な反應を見方法）與えると痙攣を起すものである。このようにカルシウムが不足することによつて、所謂子供に痙攣を起すのであるから此の點充分に氣をつけなければならぬ。

尙カルシウムの新陳代謝とビタミンDとの關係も相關深いものがあるが、カルシウムの攝取量が絶對的に不足することに對しては一層の注意を要すると思う。

さてそれは幼児がカルシウムをどのくらい必要とするかが問題となつて來る。即ち幼児のカルシウムの必要量はどの位かということである。

カルシウムの必要量を測定することはなかなか難しいことであつて、その理由を述べることはこゝには省略するが、日本人の大人が一日の食餌の攝取量をカロリーから計算して二千四百カロリーと見做し、其の場合にカルシウムの所要量は全體一日〇・九グラムとされて居る。然しこれは大人のように骨や齒は既に形成されて居る場合であるから、小兒、妊産

婦の場合などは、體重の割合から見てすつと多くの割合にカルシウムを必要とするのである。このように考えると幼児の時代には一日少くとも一・〇瓦以上のカルシウムを必要とするのである。

そこで一體この必要なカルシウム量と幼児期に於ける食餌中に含まれるカルシウム含量とを考えて見ると、今假りに白米を例にとつて見れば、白米百瓦中にカルシウムは〇・〇一瓦であるから、白米だけから一瓦のカルシウムを攝るとすれば一日に一〇匁(約七升)の白米を攝らなければならぬことになる。たとえ玄米、麥などを攝るとしても、いくらも白米と違はない。こんな馬鹿げたような數字から見ても日本人のように米や麥などを澤山食べて居るものにはカルシウムが缺乏し易いことは一目瞭然であらう。そんならカルシウムを何から取るかといえ、それは野菜類である。然し野菜類のカルシウムもその種類によつて非常に多寡があるから注意すべきである。殊に蔬菜類の中のカルシウムは、同時に含まれて居る尿酸と結合して不溶性の尿酸カルシウムとなつて其の一部は利用されることが出来ないから、蔬菜中の含量だけで安心は出来ないこととなる。然し現在の食糧事情の下に於ては蔬菜から取ることを考えることも一方法であるから、なる可く含量の多いものを撰ぶ必要がある。蔬菜類の中でカルシウムの量の多いのは、緑の葉の野菜、殊にキヤベツの外側の青い葉、かぶの葉、菠薐草、果物などがある。

其の他カルシウムの含量の多い食料としては、海藻中、こ

んぶなどもあるが、特によいのは小魚の骨を魚粉としてそのまま利用することがよい。魚粉は値段も比較的安く、又入手も容易であるから、味噌汁、ふりかけ等によつて充分利用するとよいと思う。

現在の我國の状態では無理であるが、カルシウムの補給源として最も優秀なものは牛乳、山羊乳等である。又その製品のチーズも最もよいのである。米國などでは戦前の日本の牛乳消費量の約百二十倍位の牛乳を使用して居る。誠に羨しいことである。せめて人工栄養の乳兒や幼児に充分に牛乳を與えることが出来るような状態になりたいものである。

以上はカルシウム幼児栄養食上重要なものであるということとを簡単に説明して、比較的疎にされ勝ちの點について注意を喚起したわけであるが、集團保育など、給食をする場合など此の點にも一考を煩わしいと思つてのべた次第である。

倉橋惣三氏著

『幼稚園雜草』再版

定價未定。目下印刷中。

東京都文京區元町

發行所

乾元社

物 生 の 夏 ら か 春

授 教 校 學 範 師 等 高 子 女 京 東

藏 七 堀

一

幼児の身邊にあるもので、幼児のすきな事物、現象は頗る多い。幼児は動くもの、變化の著しい物に注意をうばわれ、興味を感じるものである。したがつて、一般的にいえば、動物がすきである。いぬでも、ねこでも、またうまやうしのようなものでも、或はやぎでもうさぎでも幼児のすきな物である。ほとども、にわとりでも、またすいめやつばめのような、とり類で、もちろん幼児のすきな物である。

(1) うま、うし、やぎ。これら飼育せられる大きな動物は幼稚園内にとり入れて、幼児に世話させることなどは、むろん出来ない。しかしうまやうしが野原に出て、はたらいしているところとか、また野原につながら、草をくついているところなどで、幼児たちがうまやうしややぎをよく見たり草をやつたりすることは望ましいことである。これらの動物は従順で、人に危害を加えるものでないから、子供たちが小さいときからこれらの動物を愛護するようにありたい。それには、うまやうしになるべく親しむようにしむけねばならない。棒で打たり、石をなげつたりするような、いたずらをさせてはならない。

(2) いぬやねこ。これらは幼稚園でも飼うことが出来るとよいが、相當經費もかかり、世話もせねばならないから、幼稚園や小學校での飼育動物ではない。ことに、子供のうちには、大變にすきなものがあるとともに、大變に恐れるものがある。犬でも猫でも大變かわいがつていぢると、時にかまれたりひつかゝれたりして危害を受けることがあり、犬猫は却つて成育しないことになる。反對にいぬはこわがつて泣いたり逃げたりするとほえついたりおつかけたりするものであるから、よく注意せねばならない。

(3) うさぎ。幼稚園で飼育するならばうさぎの右に出るものはない。うさぎは子供たちの一番すきな動物であり、子供にも世話ができ手数のかゝらぬかわゆいもの

である。うさぎを飼うには箱がいが簡単である。リンゴ箱の蓋の一部分を竹すのこで打ちつけて固定し、蓋を一部分として蝶番づけにする。底に多少傾斜するようにして尿が一方に流れ出る工夫を施すとよい。いぬやねこがうさぎを殺すものであるから、飼育箱は丈夫につくり、夜でも晝でも犬ががよらないようにせねばならない。そしてうさぎのえさはなつばやいもくす、だいこん、にんじんなどの臺所くすでよい。只ぬれた物は絶対にやつてはならない。またたくさんにえさを與えることもよくない。また幼児はうさぎをいじりたがるものであるがなるべくいじらせないがよい。もしうさぎが子をうむときにはおすを別の箱にうつさねばならない。そして親うさぎの箱は暗いところにおき、うさぎの巢をのぞいたりいじつたりしてはならない。そしてうさぎのこどもが出たり来てえをさたべるようになるまで、そのまゝにしておかねばならない。これは親うさぎがそのこどもをふみつぶすことのないようにするためである。

一

とりも多くは春から夏にかけて卵を産むものである。にわとりの如く、年中卵をうむものでもひなをそだてるのは春がよいから幼稚園でとり類を飼うならばにわとりかほとまたじゆうしまつ、カナリヤのような小鳥類がよい。しかしにわとりでもはとでも、相當えさに費用を要するからその積りでかゝらねばならない。にわとりはふすまとか、麥類とかとうも

ろこしの如きえさが必要であり、また菜類もお魚の臍物の如きものも必要である。

にわとりを飼う場所は日當りがよく、常ににわとりが土をふむことが出来るようにせねばならない。そしていぬやねこにとられないように、またとりぬすびとにもぬすまれないような設備をせねばならない。それで幼稚園に常宿の人があつて、充分にわとりの世話をすることが出来る場合の外は飼育出来ない。幼児や保母の人達が日中だけ世話をすることが出来る位ではにわとりの飼育もはとやことの飼育も計畫せぬ方がよい。ことりはカナリヤとかじゆうしまつのよう、すりえさでないものを飼育する方がよいが、それでも年中宿直や日直をする人がいなくてはならない。凡てとり類には常に水を與えて置くことを忘れてはならない。すりえをやるうぐいすとかめじろなどでも時々水浴ができるように常に水を入れた物を備えねばならない。

すゝめ、つばめとか、からすやとびなども幼児の注意をひくものである。すゝめがどんなところに巢をつくるか、つばめがどんなにして巢をつくり、ひなをそだてるか、すゝめのとび方とつばめのとび方と、どんなにちがうか。すゝめがどんな歩き方をするか、つばめがあるかどうか。からすの歩き方はどんなか、からすとんびととび方がどんなにちがうかなど、幼児の注意をひくものであるからよく觀察させるがよい。またすゝめはどんな物をたべるか、つばめがどんな物をとつてたべるかなども注意させるがよい。勿論いろ／＼の

とりのなき方もきくわけさせたり眞似させることも面白い。

三

かえるでも、こい、ふな、金魚でも、またかめなどもこのすきな動物である。これらは費用も手数もあまりかゝらずこどもに世話させることが出来るから、保育室で飼育するがよい。

(1) 三月末から四月にかけて川や池また田に行くとかえるの卵が澤山にある。ひきかえるの卵はひものようになつていて、他のかえるの卵はかたまりになつてゐる。この卵をすくつてバケツにでも入れてもちかえつて水族器で飼育するがよい。古い洗面器かガラス鉢のまん中に石を入れて水面から多少出る位になし、それに土と枯葉と水などを生かして池の水を入れて置く。この水族器におたまじやくしを十二三も入れて飼育し、日光の直射せぬような所に置く。かえるの卵を水族器に入れてその變化を見るのも面白い、かえるの卵は四五日でかえる。いつ、初めて動き出すか、いつ、親かえるが卵を保護するために産出しておいた寒天からはなれるか。初めおたまじやくしはえさを必要としない。丁度にわどりの卵の中にひなとなる養分が貯えられてあるように、かえるの卵にもおたまじやくしの養分がある。しかしおたまじやくしが卵からかえると、多分にえさをとらねばならない。おたまじやくしが蛙になるまで二ヶ月もかゝらない。いつ、おたまじやくしにあしが出来るか。いつ、尾がなくなるか。尾がなくな

らない中に四本のあしが出来るると小さなかえるになる。そして時々水面からはなを出し、また水からはえ上かつてかえるになりかける。尾がなくなると小さなかえるは水中の生活をやめる。したがつて水族器から外に出るもので草原などにはなしてやらねばならない。

かえるは面白いもので、その運動する有様などは子供の興味をひくものである。

(2) 春小さなあみをもつて小川や他のところに行けば小さな魚類を捕えることが出来る。是等を水族器に飼育するがよい。どじょうでもめだかでもよい。ふなやこいや金魚ならばなおよい。金魚は賣つてゐるものを求めてきて保育室で飼育してもよい。

ふなは硝子鉢にそのいたところの水を入れ、水草を入れて二三日飼つておく。そしてその泳ぎ方などをよくみたならば、またもとの川や池にはなして置く。そうしないと死んでしまふ。

もしえびを捕えることが出来たならば、そのいたところの水を硝子鉢に入れ、水草なども入れておいて、一、二日飼つてその泳ぎ方などをよくみるがよい。

こいは幼稚園に池があればそこで飼うがよい。

(3) 金魚にはいろいろ種類がある。わきんは一本尾で最もふなに近い形をしている。體は細長く各のひれが短い。性質は強健で多く飼育せられる。色はうすあかと少しづつのもよりのあるものもある。保育室で飼うならばこの方がよい。り

うきんは尾が三つに分れ、一名尾長ともいつて胴が短く、腹がふくれ、どのひれもよく發育し、尾が大變に長い、でめきんは體は細く、眼球がとび出ている。色は黒、赤、白、黄などで中にはふの入つたものもある。らんちうは一名まることもまたししかしらともいう。胴やひれが短く、尾は三つ尾で、せびれがない。頭に肉こぶの出來たものをししらんちうといひ、出來ないものをらんちうという。

以上のわきん、りうきん、らんちう、でめきんの四種が金魚の原種である。そしてこれらのかけ合せによつていろ／＼な變種が出來る。りうきんとらんちうとのかけ合せたものはわらんちう。わきんとらんちう、でめきんらんちうとでめきんででめらんちう、わきんとでめきんをかけ合せて朱文金というように、いろ／＼ある。朱文金は和金に似て一本尾であるが、非常に尾が長く、體全體にもようがある。紅めだかは和金とほぼ同じ形でふなに色をつけたようなもので、性質は至つて頑健である。大きさは三四纏で色はうすすべである。金魚のめす、おすは見方が困難である。一般におすはめすにくらべて體が小さく、腹は常にふくれていて、どこことなく容色がよい。産卵期になるとおすは胸に白い點が出來、腹を押すと白い液が出る。

金魚の産卵期は五月上旬で産卵力の最もさかんなのは四年子である。三月下旬か四月上旬にめす一尾におす二尾位を産卵池に放す、適當な場所に魚巢（柳の根又はわらを束ねたもの）を備えておくと、朝、産卵するものである。産卵がすむ

と、直ぐに親金魚を他の池に放つ。これを忘ると、親金魚は生んだ卵を食するものである。魚巢は水温二十度位のふか池（水の深さ十纏位）に入れかえる。一回の産卵数は最少七萬粒から二十萬粒である。ふか池に入れて三日位たつと、一つの卵から一つの黒點が出來る。これが眼で、五日か七日目位で完全にかえる。かえつたばかりの金魚は體が黒色で、腹に小さな袋をつけている。これに養分が入つてゐるが、二日でおちてしまつと、同時に運動を始める。このとき魚巢を除き、一度水を入れかえ、餌として米七分もち米三分をこくこまかに粉にして與える。かくて十五日もたてば小鉢に入れて、よいものとひれや尾の不完全なだめなものを選別する。三十日位たつと、ため池へはなし、醬油かす、麥粉などを與える。また時々人糞尿を池面にまいて、害蟲の捕獲に努めると同時に一方、金魚の變色成育をはかる。ふか後、四ヶ月位で第二回の選別をする。この時は長さ三纏位になり、色もはつきりしているから色を主として選別し白色のものをすてる。このときから、えさは何でもかまわぬ。

以上は専門的に金魚のふか繁殖をはかるもので、幼稚園小學校などで出來ることではない。もし趣味としてやるならば紅めだかで、産卵からふか飼育を試るがよい。現に私は昨年實驗しためだかの子が窓際の水族器に元氣でゐる。

(4) 金魚を水族器で飼うときには、水族器の大きさによるが、多く入れないようにせねばならない。その水族器は底にきれいな砂又は小石を五纏ばかり入れる。そして水草の根を

砂の中に入れて、小石でとめて置く。うき草ならば水を入れた後その上にかべて置くがよい。水族器に水を入れるときには、植物の根が洗い出されないように、手の上に水を静かに注いで流し込むようにする。水族器には池の水が一番よい。そして水族器のふちまで水を入れる。それで植物と動物との量が適當ならば水をとりかえぬがよい。

水族器に金魚を飼うときには、えびやかめやいなやけんごろうなどを共に入れて置いてはならない。これらのものは金魚を食し、また害するものである。しかしおたまじやくしを入れて置くがよい。すると水族器に生ずる緑色のねばりけのある物を食つてしまう。水族器は夏ならば北又は東窓の日蔭のところ、冬ならば日當りのところに置かねばならない。

(5) 金魚にはえさを多く與えてはならない。或るべく控え目に朝夕二回に與える。金魚がたちまち食いつくす位な分量がよい。金魚は食いすぎると腹がふくれところり／＼と死ぬ。ありの卵、パン、かつをぶしのけづりくす、魚粉などが金魚のえさとして最もよい。えさを與えるとき、小さな鈴をならすと集つて来て、すぐに食するようになる。

金馬を硝子鉢に飼育するときは、少くとも一週に二回水を取替ねばならない。きれいにするため毎日とりかえるのもよくない。金魚が水面でパク／＼するときには、水中に空氣が缺乏して困つているのであるから水をとりかえるか、その水を汲出して五六十種のところから注ぎ入れて水に空氣を

とかしてまねばならない。それでも最もよいのは二個の硝子鉢を準備し、一週二回一つの硝子器からよい水を入れてある他の硝子器に金魚をうつすがよい。しかしその水はしばらく放置して元の硝子器と同温度であるようにせねばならない。保育室で金魚を飼うときには幼児が鉢の水中に手を入れないようにせねばならない。

害蟲にやられた金魚は元氣がなくなりつや悪くなり魚群をはれて水底にいたり、水面へ背を現わしたりする。そして少しの物音には驚かなくなる。

糞が黒く長く續くのは健康な金魚、糞の白いのはえさが不足か、病氣。糞のきれ／＼なのは病氣である證。金魚の主な病は體に白斑を生ずる粗腐病、鰓や口のくさる鰓腐病、うころがさか立つ松皮病、尾ひれがたゞれるびらし病、體に白絹をつけたようになるねまり病などである。病魚が出来たら、その病魚を他に移し、鉢の水をとりかえる。うすい鹽水で病魚の體を洗い、滋養物を與えると次第に回復する。金魚にしらみが寄生すると金魚は容器のふちに體をこすりつけて泳ぐから白い茶わんなどに入れて蟲を見付けその蟲をとつたあとに煙草のうすいしるをつけてやるとよい。

(5) かめも幼児のすきな物の一つである。いしかめを飼育するには水族器に僅か水を入れ、甲を干すことが出来るように必ず石を入れてその上に出ることが出来るようにせねばならない。かめは魚類と異り、空氣を鼻の孔から呼吸するものである。餌としては時々みみず、おたまじやくし、どじょう

のようなものを興えるがよい。かめはまた植物性のものをも食するものである。かめは大變に面白いものであるから、机の上をはわせたり、床をはわせたりしてもよい。しかしふむと甲がくだけるから幼児たちにいたすらをさせない方がよい。

(6) えび、かに、やどかりなども幼児が興味をもつ。これ等は硝子鉢、バケツなどに二三日飼育してそのおよぎ方やはえ方などをよく観させるがよい。はまぐり、あさり、しじみなどは二三日飼育出来る。はまぐり、あさは海にすみ、しじみは海にも川にもすみ、いずれも浅き水底の砂泥の中にしそみ、殻を少し開いて下側より足の先(普通舌と思われている)を前方に出し、これを伸縮して砂泥を押分けて徐々にはう。又體の後端の管を伸して殻の間より出し、常に水をして下の管から左右の膜の間に流れ入り、上の管より流れ出させる。流れ入りたる水中にまざつてゐる微細な生物が口に達すると、これをとつて食う。糞は體の後端の上の管から水と共に流れ去るのである。生きたかひの飼育觀察は出来なくともはまぐりのその他の貝殻を集めて遊ぶことは幼児にはまことに面白い。

(7) かたつむりは陸上にすむ巻かいで、幼児の面白がる物である。中にはかたつむりを大變に恐れる幼児がいることもある。かたつむりは五月雨の頃ふきやめうが、しようがなどの生えているところ、また竹垣のところ、あじさい、やつでなどのところをさがすと大きなものがみつかる。これらをし

めつた砂や泥を五六粒の深さに入れた硝子鉢に入れて布片かハトロン紙などで蓋しておくと。容易に飼育出来る。かたつむりは濕氣があるところをはつて若芽をなめたりまた腐つた物などを食するものである。乾くと殻の中にとじこもつていわゆる夏眠をする。二月でも三月でも殻の中にとじこもつていても死なない。氣をつけてみるとかたつむりの巻き方に二通りある。左巻まゝまい。右巻まゝまいとある。また殻のすじの數で一すじまゝまい。二すじまゝまい、三すじまゝまいという區別がある。

四

(1) 春から夏にかけてさく花は頗る多い。うめをさきがけとして、さくら、もも、すもも、なしの花、つばき、あぶらな、れんげ、たんぼぼ、すみれ、また、つつじ、きりの花、ふじ、はなしようぶ、しやが、いちばつ。山吹、こぶし、もくれん、杉、松、柳、もみじ、桑、なら、柿、栗など、いろ／＼の木にも草にも花がさく。是等の花を採集して瓶に挿し、保育室に陳列してその名稱、花の形(狀色や香など)比べさせる。また名稱のあてつて遊びをさせても面白い。花を集めるときには公園や私有園などから採集してはならない。また同一種類では一二本あれば澤山である。むやみと折り取ることをさげねばならない。幼児は破壊本能があり、蒐集本能があるので、とかく草花でも木の枝でもむやみと折りたがるものであるから、それをさせないように導かねばならない。

頭から叱ることはよくない。樹木でも草花でもまた葉でも必要もないのに折つたりいためたりしないようにさとさねばならない。また採集したものは、すてたり枯したりしないように、瓶に生けて室内を飾るようになさるべき。

お天氣のよい日に幼児を春の野につれ出してあそばせ、春咲く草花などを、なるべく多く採集させるがよい。もちろん一種には一二本、一にはおなじものは一二本だけ採集させる。必要がないものは多く折とつてはならない。なるべく葉も根もつけて採集させることが出来る。と結構である。そして採集箱に入れて枯れないように持歸り、花瓶にさすか、鉢植にするがよい。つみ草や花束つくりといつて、要もない草花をむやみと多くちぎることは悪い風である。草花にも木の實にも毒のあるものがあるから、むやみに草花や木の實などをとらないとともに、これらを口に入れたりさせないように注意せねばならない。ことにままごと遊びに使うものには注意をはらわねばならない。

春さく花の形や色についてくらべて見ると面白い。白い花のさくもの、赤い花のさくもの、紫の花のさくもの、また黄色のものなど、いろ／＼ある。また大きな花と小さな花とで分けて見るのも面白い。また形の似たものと違つたもので分けて見るのも面白い。また葉についてもくらべて見るとよい。細い葉、圓い葉、大きい葉、小さな葉、ふちのぎざ／＼のある葉とぎざ／＼のない葉、すべてこい葉とそうでない葉と、いろ／＼にくらべさせたりさがしをさせたりして遊ばせる

とよし。

(2) 花がどうしてあんなにきれいに咲くものであるか。昔は誰もそれを知らなかつた。一つの花の花粉が他の花のめしべに運ばれて結んだ種子が最もよいものになることは今日では明白となり、そのおしべの花粉がめしべに運ばれるために、花にいろ／＼の工夫が出来ているのである。風や水で、またみつばち、が、ちよう、はえ、あぶ、かぶとむしの如き蟲にでも花粉が運ばれ、時には人によつても運ばれるのである。これらのことはもちろん、幼児に説明してはいけない。しかし花にくる虫をよく観させたり花の有様をよく観させることはまことに結構である。

花をおとすれるもので、最も面白いのは虫である。注意して花の形状を見ると、虫が花に入るのに工合よく出来ていることが分る。つじの花は多く横にななめ上に開き、上のは花瓣にもんがあつて蝶などの眼につきやすい。蝶が管のような口をのぼして上の花瓣のものとひだになつて一本のおしべがはさまつたところから出る蜜を吸う。その蜜を吸う蝶の體におしべの葯がふれる。すると葯の上方に孔が二つ開いて、糸でつづられた花粉が出るようになつているから、花粉が蝶の體によくつく。それが他の花をたすねて蜜を吸うときその花のめしべの先に花粉がつくといつた、誠にうまいしかけになつてゐる。

ふじの花でもはなしようぶでも、またかきの花でも栗の花でも、それ／＼いろ／＼な虫を呼ぶようなしかけになつてい

る。氣をつけて見るとまことに面白い。幼児にはそんなことは分らないが、見るとだけは見させるにこしたことはなし。

それで花にはそれ／＼、集まる虫がきまつている。ふじの花にははち、あぶ、つづじには蝶、かきの花では蜜蜂、栗の花にははえやあぶなどが集まっていることが多い。大體、白い花には夜、がが多く集まり、派手な花には蜜蜂や蝶、悪い臭を出す花にははえの集まることが多いものである。どんな花にどんな虫が来るか、注意させることも面白い。

てんとうむしがどんなところにいるか。ありはどんなことをしているか、幼児は小さな虫にもよく注意するものである。

(3) 花壇にいろ／＼の草花をつくつたり、そらまめ、えんどう、きうりやかぼちやまたトマトやナス、或るいはじやがいもやさといも、さつまいもなどを栽培して幼児とともに草とりをしたり水をやつたりすることは幼稚園の庭がせまくとも、多少工夫すれば出来る。また瓦鉢でもお菓子箱でもよい、土を入れてあさがおの種子をまいて世話させる位はどこ幼稚園でも必ずさせたいものである。

〔二九頁から〕

これをつとめていえば、幼児を幼稚園へでなく、幼稚園を幼児へである。もつと、くつきりしたい、かたをすれば、幼児に幼稚園を作らせるのである。ことしの幼児に、ことしの幼稚園を作らせるのである。つまり幼児を古い幼稚園へ押し込むのでなく、新しい幼稚園を幼児に興えようとしてこそ、新入園児を迎える眞の心ではあるまいか。

といつて、幼児の御きげんをとるというのでもなく、幼児のわがまゝを放任するといふのでもない。苟も幼稚園たる以上れつきとした教育目的を失わない。それでこそ幼稚園に入れるのであり、親も亦、幼児を幼稚園に通わせるのである。しかし、その新入園児を迎える心としては、どこまでも、その子をその子として迎える心である。先ずこの心で迎えることなしに、眞にその子を幼稚園に入園させることは出来ない。――新しく来る一人々々の子。これを離れて新入園児を迎える心はない。

(東京文理大兒童研究會『兒童研究』昨年四月號所載抜録)

X X X X X

X X X X X

生きた興味と主題による遊戯

東京女高師幼稚園 岡崎修子

○ 生きた興味による遊戯

毎朝「おはようございます」と段々に元氣な顔がそろつてきますと、必ずともいつてよいように「今日お遊戯する？」ときくお子さんが一人はあります。

それが特にお遊戯の好きな子ときまつたわけではなく、大して關心を持つていないような顔をしている子、時には一緒にするのをこばむような子たちまで、其の顔ぶれが日により色々で、時々「おやつ」と思うことがあります。

「お遊戯するの？」ときいたお子さんは、今すぐに身體を動かしてしたい氣持で一ばいなのですから、すぐ樂器で伴奏するなり歌つてやつたり出來るとよいのですが、何か他の事をしていたり等して仲々思うようにならない事が多く、「したし」という氣持をむだにすごさせてしまう事がしばしばあり

ます。

それに又悪い習慣とでもいふまじようか、ちやんとお遊戯室に行つてするのでないとお遊戯ではないような感じがし、お子さんの方でも、そうするものと思ひ込んでゐるために其所がふさがつてゐる場合など、保育室ではうまく興にのらない事が多いのです。

お遊戯室を使うのは勿論よいのですが、餘り型にはまりすぎで、或るきまつた場所でないで落ちて充分に出來ない、というのは面白くないので、近頃は場所にこだわらない、というために保育室もなるべく活動的にし、又庭でも歌の伴う遊び的なものを多くとり入れたり、手があつて屋上とか本校の方の廣い運動場にゆける時には、笛とかハーモニカ等を持つてゆき、變つた環境のところでも何時もと違つた音色によつてやつてみますと、又違つた樂しい氣分であることが出來ます。

その上、野原にいつたりしますと、葉つば、花、石など自然の色々のものを相手としてよく遊びます。特にバツタ等動物になると夢中です。そこで創作の第一歩ともいえる自然物の模倣をして面白く遊ぶことが出来ます。

或る秋の日運動に行つたとき、自發的なお子さんはそれぞれ好きなことをして遊んでいる時、先生のまわりをはなれない何人かの人達に「ばつたになつてみない」とさそいかけてみました。案の定、皆ピョン／＼と其の場ではね出しました。暫くお互にはねてふざけたりしていましたが、餘り變化がなく面白くないので段々にする人が少くなつてきました。

草原ですから都合のよいことにいくらでも本物がいます。

「あら、あのばつたあんなに遠くまでとんでいつた。こゝのはあるいている」だの色々と観察し話し合つたりして後、もう一度してみますと、今度は羽を使つてとぶのや、歩くのや、ボンと長い足を使つてとぶの等色々様々、時には私や友達の間の方につかまつたりして「おんぶしているの」——

そこまですると大進歩です。何時の間にか他の事をしていた人達も集まつてきて、それから蝶々になる者、とんぼになる者、花、つかまえる人、木、と色々に変つてき、しばらく各自が獨創的に動きまわります。

何時もの事ながら、特にこういうときは、適當な音楽をさつとつけてあげられたらもつと／＼たのしくやれるでしょうと思わずにはいられません。

○ 主題『山のぼり』

さて保育再教育講習の時に皆さんに御覽いたゞいた『山のぼり』ですが、何時もしているお遊戯が、何となく知つているものゝ展覽會といつた感じがしますので『山のぼり』という一つの主題をこしらえて、其の中に既習のもの、前記のバツタ遊びのような自由表現のもの、リズム遊び等を入れてみました。

第一日目

山にのぼる事を話し、持ちものも各自好きなものを持つことにし、前から二人づつの相手をきめて一列の圓をつくりました。段々と家にさそいにゆくところからはじめます。圓心にむきしやがみ音に合はせて拍手しています。先頭になりたい組から、大體八時間位でゆけるところの組の前について呼びかける動作（おじぎでも手まねぎでも自由）をする。さそわれた組は、其の組のあとについて順々に皆をさそいます。

さそい終つたら、さあ汽車にのりこみましよう「汽車／＼早いな」で山に向います。誰か男のお子さんに笛をかして車掌さんになつてもらい、笛の合圖で出發します。そして動作が終つて止まると同時に、どこでも好きなところの名前を云うことにしておきます。大抵は「いなか」というのですが、此の日は「日光」といつたので實に山のぼりにふさわしい感じ

がしました。

いよ／＼山にかゝります。歌をうたつて歩いたり、ピアノに合はせ大きい音、小さい音の區別をつけたり、アクセントのある音を強くふみつけたり、暫く變化をつけて歩きます。坂道にかゝります。「とても高いのよ」というだけで歩き方も音を倍にとつて實に感じを出してくれます。

もうそろ／＼小鳥の聲も、木々のさゝやきもきこえてきます。うです。「小鳥のおはなし」「もみぢ」「木の葉」「松ぼっくり」等ふさわしいものをいれました。

當日は何といつても普段と變つていたのでお子さんも勝手が違い、かえつておとなしくなつてしまつた方もあつたかわりに、大部分が落着かず、どうしたらよいのか分らないようにさわ／＼してしまいましたので、ピアノからはなれ「一寸おやすみしてゆきましょう」ということにして、或るお話しの内容をかえて「三郎ちゃんとおバツタ」という作り話をしました。その間に幾分落着いた様子なので又出發しやつと山の上につきました。

「山は高いので方々がみえますけれど、とび上るともつと遠くまで見えるのよ」と皆で合はせてとび上つてみました。一、二、は豫備音の動作、三、で膝をうんと曲げてとび上る。四はおやすみ、たゞこれだけの事が仲々出来ないのので皆大騒ぎでした。とび上つた後にきいてみますと、海がみえたり、家、木、空、等様々です、第一日目はこゝまでで、明日の豫定を少し話し合つて終りにしました。

第二日目

前日にひきつゞき今日は山の上の遊園地で遊ぶことにしました。

「山のみなさん」「鬼ごっこ」をしたり「ギョコンバツタン」「ブランコ」にのつたりして後、昨日のお話しの中で海が見えたことにちなんで「おふね」「貝拾ひ」「ポートルース」をして遊びました。

「貝拾ひ」はお子さんの大變好むもので、各自思い／＼に波になつたり、拾う人になつたり何度でもあきることなくやります。「ポートルース」は年長組になつてから「いや」という事を耳にするやうになりました。腰が固定して上體だけの動作なので、しかも競争の形になるので、何度もする事はつかれるのでしよう。けれど審判官になるうれしさ等でお子さんの好むものゝ一つです。

次に「こころ」「花いちもんめ」「どなたの細道」などいわゆる遊び的なものをして後、前にあげた「野原での遊び(自由表現)」をして時間の都合で山をおりるひまもなく遊びを中心にした第二日目を終りました。

スキップ

二日共お遊戯のあとスキップに相當時間をかけて一人づつやりました。

お子さんの大部分が「お遊戯／＼」と騒ぐのは、此のスキ

幼 児 と 語 る 心

大 塚 喜 一

子供と共に、おはなしを樂んでゐる時、ガタンと戸が開いて人が入つて來た。この際、話者自身の心の動きが最も戒心せらるべきである。ハッ！とした途端、焦慮、不安等が自分の心を亂し曇らせては、もとの平靜な状態に復歸するまでに時間と精力とを空費せることになる。その爲におはなしの場が、そして子供達が亂される道理が判れば、話者はいつ如何なる場合にも、子供達と自分との心の交流の中にしつかり生きることを第一義として心がくべきである。そこにこそ「子供と語る」話者の心の世界が成立する。この世界に住む我は、話を聴く子の心と合體して、彼我を一つの線に結ぶおはなしの純一無雜の統一態度に一貫出來る。それは、子供と交る私の鍊成の道場であ

るとともに、子供を信する私の安任の聖地である。智情意未分の具體生活をしてゐる幼児期の教育は、對象たる幼児自身の生活態度を基本とするものであるから、おはなしに於ても、聴く子の心の動きに應じて共に語るところに特色があり、智的教材として外より與えらるゝ年長児の場合に比し、どこまでも對象に即する態度を以て、聴く子の心を受けて語るのだけければならぬ。こゝにおはなしは幼児との交りに於てのみ成立するものである事の眞理が、話者たる自分に必然に感得せしめられ來る。

幼児は、ことばが單純なだけ、一語の表現の適否も、それが全體に對する効果が大きい。すなはち、一語一語をゆたかに、ふくよかに、一ばい心の味をこめて、語ることによつてのみ、眞に清純な生氣をおはなしに充たしめることが出来る。だから、おはなし全體の統一のうち自己を正しくはたらかせてゐる話者は、その發する一語々々がおはなしの底流をなす自他一如の泉から滾々と流れ出るわけで、かゝる純な表現にこそ、眞に幼児と共に語る幼児の佳境が顯現するのである。この際話者は、おはなしの場面を今聴いてゐるあの子この子に靜觀しながら、その靜から動への今の呼吸——生命の流れ——にピッタリあつて語つて行くのであつて、かくして、聴く子と語る我との間に流れる生命の創成が、現に進行しつゝあるおはなしに刻々と具現されて行くには、その題材が發度もくりかえされて幼児と語る眞體驗で成されてゐることを要する。又、かゝる洗練の道程を経て漸次に熟しゆく交りの線に副うてのみ、話者の修行の深さが現出される。かくて又、おはなしが、幼児の魂を守り育ててゆく地上の天國の妙音として成就せられるのである。(二三・四・一六)

新入園児を迎える心

倉 橋 惣 三

『ことしもまた、おおぜいの幼児たちが入園して来た』

こう、われ／＼はいうのであるが、實は『ことしもまた』のもと『幼児たち』のたちとに、よく考えてみなければならぬ問題がある。櫻咲く春四月、たのしく、にぎやかに迎える心には變りはないが、うき／＼と花見の御連中を迎える心とは別のものがある。

ことしもという言葉には、去年おとしに關わりついているところがある。殊に、もの一字に、創立以來幾とせを重ねての、同じことのくりかえしという響がある。ことしもと此春を新しく思うところもないではないが、それは年々歳々花相同じの原則に立つてのことで、去年おとしに何の關わりもなく、ことしをこ

としとしてのみ生きている幼児に對しては、意味ないという以上、極めて當てはまらない心もちである。毎年の入園を、古くから引きつづいたもの、第何回と數えて繰りかえしているものとする、幼稚園側、つまりおとなの心もちである。ことしだけしか自分の入園のない幼児には、なんの關係もない話である。それもまあ、入園式としては、そう思うのも差支えないとして、ことしの新入園幼児を、去年おとしの幼児の引きつづき、繰りかえしと思つたら、とんでもないことである。年々歳々人相同じからずの哀調とは全く別の同じからずだが、新入園の幼児決して去年おとしの幼児ではない。それを同じもの——幼児というものが來ると思つたら大きな心得違ひであ

る。その心得違ひが、もの字のさせる淺い不注意であつたり、根深い誤謬になつたりする。心理學者の對象としては幼児というものがあるが、教育の實際の對象には、ことし初めて迎える太郎があり花子があるばかりだ。假りに同じ名の子であつても、ことしの太郎花子は、去年おとしの、あの太郎でも花子でもない。幼児というものとしたの共通性に屬するを常とはするが、それを、ことに、ことしも來たねで迎えられるは、第一どんなに面くらうことであらう。更に、教育としては、どんな思いがけぬ誤りをおかすことであらう。

もの字論議はこの位として、次は、幼児たちのたちである。おおぜい來るのだから數えておおぜいというはいゝ。しかし、そのおおぜいを一括して、幼児たち呼ばわりは、まだしも太郎花子を逸するものになる。たちで扱われるのは幼児というものの共通屬性においてある。幼児というものなどとは思つて居らず、別々の自分のみ思つている幼児にとつて、自分も君も、たちの中にはいつてい

るのかと、顔を見あわせずにいられ
ない。それも入園式に着席させるには、た
ちで集まらせてたちでおじぎをさせても
いいかも知れないが、その翌日からの教
育の實際の對象としては、たちなんとい
うものはあり得ない。たちの敬語の『皆
さん』が口癖になつてゐる先生は、それ
ほど深い譯あつてたちと呼びつけるので
はあるまいけれども、そこから教育とし
ての大きな誤に落ちること、或はも以上
かも知れない。いくらもの字すきの先生
でも、ことしの幼児はことしの幼児とし
て新たに迎える心をもつだろうが、目の
前に集つてゐるたちには、教育的錯覺を
起し易いからである。たちで扱ひ通して
たちで送り出す一たび教育の誤りも、始
めのたちがもとになるのを戒めなければ
ならぬ。

もで貫き、たちで束ねては、心理學の
問題にはなるとしても、それだけで實際
教育は出来ない。その幼児心理學にして
も、第一篇幼児心理通性論、第二篇幼児
個性論と揃へることは忘れないが、どう
も従來の學としては、通性がもとで、そ

の中に個性があると思わせる説き方をす
る。そこで、初學者には、幼児というも
のが先ずあつて、その中に個々の幼児が
あるように思ひこませたりする。そうし
て、先ず實體の個の幼児を見る目も、感
じる心も失わせたりさへすることがあ
る。それは、心理學としてはとにかく、
教育の實際にとつては、危険極まること
である。屢々、その教育に致命的誤謬を
與えるほど危険である。況して、自ら教
育實際家を以て任ずる幼稚園の先生がも
やたちで新入園児を迎えてなんとしよ
う。そんな迎え方は、幼稚園の經營者や
管理者や、町のしろうとならとにかく、
苟も幼児教育のくろうとの心ではない。

新入園児を迎えるに當つて、くろうと
の先ず思うことは、ことしはどんな子が
来るだろうかということであつた。それ
も、たゞ、あんな子か、こんな子かの見
當だけではなく、いゝ子が来ればいゝ、
悪い子でなければいゝという、注文など
は勿論なく、一人々々、どんな子が来る
だろうかという待ち受け心であつた。幼
稚園だもの、幼児というものが来るのは

きまつてゐる。そんなこと、教育的に迎
える心でもなんでもない。教育實際家の
迎える必は、もつとこまかい。一人々々
を迎えないで、なんの實際に迎へる心で
あろう。この心を裏からもつと綿密にい
えば、一人々々のどんな子をも、一人々々
こんな子であるとして迎へたい心であ
る。

新入園児を迎へるに當つて、ほんとう
の教育實際家の胸はわく／＼してゐた。
ことしはどんな子が来るだろうかと思へ
ばわく／＼せずにはゐられない。そのどん
な子かを、一人々々とりちがえてはなら
ぬと思へば、わく／＼以上はら／＼せず
にゐられない。とうとうと、心配ばかりのよ
うでもあるが、教育實際家として頭と腕
に自信のあるものには、そこにこそ樂し
みがあるというものである。その心配と
樂しみとの錯綜するところに、常に教育
の教しみの實際家らしい、若々しいわく
くもはら／＼も起る譯である。もとたち
で片づける所謂年功者、自稱熟達者に、
らく／＼だけあつて、わく／＼もはらは
らもないのは幸福とすべきか、不幸とす

べきかは、どう考えようと、その人の勝手である。

序にもう一つ、『入園し来る』の入園についても、前のもやたちとは少し意味が異なるが問題がある。それは、幼児というものにしても、どの一人々々の幼児にしても、たゞそのありのまゝで来るのではなく、入園という条件つきの心境で来る点である。条件つきの心境ということ、幼児においてはおとなの如く強いことではないとしても、決して平氣ではあり得ない。殊に神経質な子にとつては苦しい影響を考えずにはいない。入園當座ホビヤ・ヌクツルヌスを起す子さえある位である。ところで、入園の心境なものは、わが家から別のところの新しい刺激によることも大きい、別のところといつて、ピクニックの春の野邊とはちがう。公園とも動物園ともちがう。そういうところでは、新しい刺激によつて、却てその子のありのまゝを發揮させることもある。入園はそうでない。幼稚園という、子どものためとはいふながら、特別におとなが作つた特別の世界へ、とにかく、あらたまつて入園するのである。進歩的な幼稚園、進歩的などといわれないで、心ある幼児教育者なら、その特別の世界を、出来るだけ特別の世界として感じさせないように意を用いる。それでも、やわらかい幼児の感性には、その世界の空氣の中に、酸素か窒素かいずれにせよ、必ず含有されている教育が感ぜられずにいまい。先生の目に教育的暗さが見えたりするときは勿論、先生の笑顔にも、教育の太陽の眩しさがあることもあろう。幼稚園は子どもの社會的刺激が強すぎるという評もあるが、それが、子どもだけの純の世界ならたいしたことはない。つまりは、その世界のうしろにいる先生によることである。まして、前景におし出た先生からの刺激は決してこわいなどいうことではないが、うぶな幼児を、それこそ、わく／＼或ははら／＼させることも多からう。

心ある先生が、入園式の第一印象から入園當時の生活に就て、如何に苦心するかの実際は、こゝでは問題にしない。こゝで問題にするのは、新入園児を迎える

心として、一人々々を、どういう子かを迎えたい心として、入園という条件つき心境を計算にいれないで、その子を見てはならぬ點である。その子が眞にどういう子かを知るうえに、先生にとつて大きな力をもつものは、その子への初印象、始めの觀察である。それで、その子を解了つたと思ふ先生はないとしても、それが、先入主となることは免れない。その先入主をつくるものから、その子の條件つき心境を、こまやかに察し、同情深く理解し、假りにも新入園當時を以てその子を斷定しないように心がける必要がある。

新入園児を迎えるに當つて、どうしたら『幼稚園の子』にすることが出来るだろうか。殊に、どうして早くそうしようかと思ふのは、必ずしも正しくない。つまり幼稚園の子にならせたいところもあり、また、そうなるのでもあるが、新入園児を迎える心としては、寧ろその反對である。どうしたら、幼稚園を幼児のものにすることが出来ようか、という心である。(二二頁へ)

日本幼稚園協會
保 育 講 習 會

期 日 七月二十一日から同二十五日まで五日間

——午前八時から午後四時まで——

會 場 東京女子高等師範學校講堂
會 員 幼稚園、保育所關係者、その他

學校教育法における幼稚園

文部省學校教育局初等教育課長

坂 元 彦 太 郎 君

兒童福祉法と幼兒保育問題

厚生省兒童局保育課長

吉 見 靜 江 君

幼兒保育方法の原理と實際

東京女子高等師範學校教授

倉 橋 惣 三 君

幼兒の心理的諸發達と教育

恩賜財團愛育會研究所教養部長

山 下 俊 郎 君

リズムと指導

東京女子高等師範學校教授

戸倉ハル君

製作實習と指導

東京女子高等師範學校教諭

及川ふみ君

『保育要領』研究懇談會

司會 倉橋惣三君

會費金 百圓

——當日お持ち下さい——

申込

七月十五日までに、はがきで、姓名、住所、勤務先き名稱と所在地を詳記して、東京都文京區大塚町、東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會講習會係宛。

○御住所は何か御通信の必要のあつた時のために、明細にお記して下さい

昭和二十三年五月

日本幼稚園協會

會 か ら

○新保育期を、お子さん方のために、先生方のために、心から祝福します。

○坂元彦太郎氏の論稿は、眞に此の人によつてこそ、眞に此の標題を以て、語り得られるものであります。「新生」の語を、喜ぶと共に想い、想うと共に喜ばずにいられません。

○森重醫學博士から與えられる知識は、保健保育の資料として貴重なものであります。私達として勉強すると共に、家庭にも傳えるよう、是非つとめたいことです。

○堀七藏氏にお願いして、お忙しいところ、くわしく書いて頂きました。生物學を教えるという譯でもないのですが、幼児のすきなところ、幼稚園理科教育の大切な要訣を見落しますまい。なにせよ、私達はよく正しく知つていなければなりません。

○岡崎修子氏 保育實際記述は、新保育法の重要な問題を示すものとして、充分研究的に讀んで頂きたいものです。遊戯の新しい指導、というよりも、幼稚園における遊戯の在り方として、新しい工夫です。

○用紙、印刷の値上りのため來月第五號から本誌定價を金貳拾圓とします。再々のごことで誠に不本意の至りですが事情御諒承下さい。

文部省編「保育要領」

定價 金八圓九拾錢

送料

一冊（第四種便）

二圓四十錢

二冊（〃）

三圓六十錢

三冊から十五冊まで（小包便）

五圓

十六冊から三十冊まで（〃）

八圓

三十一冊以上八十冊まで（鐵道便）

十四圓

距離五百キロ以内

二十八圓

距離五百キロ以上

二十八圓

右代金に送料を添えて東京都千代田區霞ヶ關文部省學校教育局初等教育課宛申込まれれば送付の便宜を與えられるということです。

『幼兒の教育』編集

編集主幹 倉橋惣三
協力委員 牛島義友

及川ふみ
齋藤文雄
多田鐵雄
山下俊一郎
(五十音順)

編集部員 丸山長治

日本幼稚園協會

幼兒の教育 第四十七卷 第四號

定價 金二拾圓也

昭和二十三年四月十五日印刷
昭和二十三年四月二十日發行

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

編集兼 倉橋惣三
發行者

東京都千代田區神田神保町二ノ四

印刷者 小河幸三郎

東京都千代田區神田神保町三ノ二九

印刷所 明和印刷株式會社

東京都文京區大塚町三十五

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會

東京都千代田區神田神保町二ノ四

發賣所 株式會社 フレーベル館

電話九段(33)三九七一番

振替東京一九六四〇番

○本誌御購讀について注文申込その他は凡べて發賣所「フレーベル館宛に願います

日本幼稚園協會編

幼稚園お話集

上全
中三
下冊

定價各金四拾五圓 郵送料各 金 三 圓

いつでもですが、わけても此の頃、幼児の心は、いとお話に飢えています。幼児のためのいとお話とは、聴くに楽しく、ほどのよい甘さもあつて、柔い心の味覺をよろこばせ消化し易く、純な心の榮養となることでありましょう。そうゆう好評で初版以來廣く行われ、その後暫く絶版になつていた、日本幼稚園協會編の「幼稚園談話集」に、除くべきものは除き、新しく四十餘篇を加え、全體に亘つて嚴密な校訂が行われ、三冊に分装せられたのが此のお話集であります。幼いお子さん方の必須の心の糧として、幼稚園、保育所及び家庭の、久しき御待望に應じ得ますことは、幼児保育界におつとめすることを使命とする、本フレール館の大きな喜びであります。

保育證書

定價金二圓
送料一圓廿錢

輪廓は色刷、文字は墨で印刷してあります。園名入りの場合は別に一枚二圓申受ます(但し百枚以上のこと)

及川ふみ先生畫

又
リ
エ

卷一年少用 定價各 七圓
卷二年長用 定價各 一圓廿錢

じゅう畫帳

定價金拾三圓 一圓廿錢

手技用折紙

赤・青・黄・綠・紫 五色
各色 五十枚 一組 金貳拾圓

出席カード

十二枚一組 定價金 拾五圓

月謝袋

五十枚一組 定價金四十五圓

出席簿

五十枚一組 定價金五十圓
送料は各品共全部一圓二十錢

發行所

東京都千代田區神田
神保町二丁目四番地

株式會社

フレール館

振替口座東京
一六九四〇番

先生三惣橋倉顧問

キンダブック

定價一冊金貳拾圓 送料金五十錢

繪雜誌界の最高峰

幼稚園，保育所，お家庭のお子様方に
眞心をこめて捧ぐ

各地代理店

發行所

株式會社 **フレール館**

東京都千代田區神田神保町二丁目四番地

電話九段(33)三九七一 番振替東京一九六四〇番

北海道帶廣市東一條南九丁目一〇

北海道代理店 柏幼舎

高崎市田町三丁目十六番地

東北代理店 淺見商事

群馬縣伊勢崎市新町

東北代理店 關東興業株式會社

新潟縣柏崎市諏訪町二

新潟代理店 川合政一

東京都葛飾區金町二ノ一〇七二

東部代理店 岡田廣太郎

福井市聖島上町五十六番地

北陸代理店 柴田喜一

松山市末廣町二丁目二十二番地

四國代理店 幼兒の友社

岡山市弓之町百三十四番地

中國代理店 明生社

岐阜市湊町十八番地

關西代理店 安田商社

東京都杉並區西荻窪三ノ九五

關東代理店 新友社